航海者が語るヴェネツィア
―16世紀オスマン朝の航海案内書から―

新　谷　英　治

はじめに

アドリア海の北端に位置するヴェネツィアは現在イタリア北部の観光都市の一つに過ぎないかのように受け止められることもあるが，かつては地中海世界に広く拠点を設けて対外活動を展開していた海洋国家あるいは海洋帝国ともいうべき有力な国家であった。とりわけ15，16世紀には，当時東方で隆盛となり海上と陸上両面からヨーロッパ世界に向かって勢力を拡大しつつあったオスマン朝と地中海域，わけても東地中海において海上覇権を争う存在であり，オスマン朝との政治的・経済的対立はしばしば直接的な軍事衝突に至った。両者の関係――それは平時の交易・交流，戦時の対立・衝突ともに見られるのであるが――の一方の当事者であるオスマン朝はアドリア海の最奥部に陣取るこの有力な対抗者ヴェネツィアを，地理的あるいは歴史的な情報の面で，どのように認識・把握していたのであろうか。

本稿では，16世紀前半にオスマン朝でピーリー・ライース Pîrî Ra'îs（?-1554年頃）の手によって成立した地中海航海案内書『キターブ・バフリエ』*Kitâb-i Baḥrîya*[1] を手掛かりに，オスマン朝の対ヴェネツィア認識の具体的な様相を探る。『キターブ・バフリエ』のヴェネツィアに関わる記述（本文）とそれに対応して付された付図（絵地図）の描写を具体的に分析しながら検討してみる。主として注目するのはラグーン（潟湖）上に建設された海上都市たるヴェネツィアそれ自体であるが，近隣のいくつかの都市や海港に関する記述・描写等も行論に必要な限り視野に入れつつ，オスマン朝から見たヴェネツィア

像を検討していく。『キターブ・バフリエ』のヴェネツィアに直接関わる部分についてはすでにÖkte 1988: 888–905やBausani 1990: 19–20，Ülkekul＆Can 2007: 104–107，Ülkekul 2015dなどで現代トルコ語訳や英語訳，イタリア語訳，各写本の付図の検討などが試みられており，それぞれ裨益するところ大である。本稿ではそれらを参照しつつ，『キターブ・バフリエ』におけるヴェネツィアの位置づけ・比重に注目しながらこの町に関する記述と付図が語るところを探る。これは，『キターブ・バフリエ』を通して見たヴェネツィア像に留まるのであり，16世紀前半にオスマン朝海軍で活動した一航海者であるピーリー・ライースが描いたヴェネツィア像以上のものではないが，16世紀のオスマン朝の人びと，とりわけ海軍を中心とした統治者層による西方理解の一端を知るよすがとなろう。

なお『キターブ・バフリエ』は，すでに知られている通り2系統の原本（ヒジュラ暦927年本［1521年成立］と同932年本［1526年成立］）があり，それぞれから書写年代の異なる比較的多数の写本（927年本系写本30点前後及び932年本系写本10点前後，計40点余り）が伝わっている[2)]。著者（編纂者）ピーリー・ライース自筆の原本はどちらも未発見である。本稿ではAyasofya 2612写本を中心に932年本系写本におけるヴェネツィアの姿を提示することを主眼としつつも，Bağdat 337写本を中心に927年本系写本におけるヴェネツィアの姿もあわせて考察対象とし，可能な限り総合的に分析を進めたいと考える。また，行論の必要に応じて，一覧で示したそれぞれの系統の別写本もあわせ参照する。

上で述べた通り，ヴェネツィアについては932年本系写本に注目し考察の基本とするが，927年本系写本の描写内容は932年本系写本とは異なる点も含んでおり，その違いは興味深い。『キターブ・バフリエ』の927年本及び932年本両系統の写本群の比較は大いに興味を惹かれる課題であるが，それは本稿の直接の目的ではないため深入りは避けつつ，932年本系写本に基づく日本語訳とともに927年本系写本に基づく訳も示し，両者に示された情報を比較・整理して

理解したいと考える。

なお，上述の通り927年本，932年本ともに原本は未発見であり，いずれについても写本を比較検討してまとめられた校訂本は提供されていない。本稿では，それぞれの写本群において可能な限り比較参照しつつ翻訳と内容理解にあたるが，作業上の不手際や遺漏も避けられないと思われる。その意味で両系統それぞれについて依然試訳の域を出ず，本稿も試論の域を出ないことを予めご承知いただきたい。

Ⅰ　『キターブ・バフリエ』におけるヴェネツィア

上のような事情を念頭に置きながら，『キターブ・バフリエ』927年本系写本と932年本系写本のヴェネツィアに関わる記述内容を比較しつつ全体を見渡すためにそれぞれの日本語訳と必要最小限の注を以下に示す。前者の第62章，その内容に対応する後者の第92章（ヴェネツィアの北東の地域が説明される）と第93章（都市ヴェネツィアそれ自体が扱われる）の２章を対象にする。翻訳にあたっては927年本系写本では Bağdat 337を，932年本系写本では Ayasofya 2612を底本としているが，必要に応じて可能な限り他の写本も参照して補うこととする。

なお，写本原文には「第62章」「第92章」等の表示は無く，本稿執筆者が便宜的に使用しているものである。訳文や注において鉤括弧や丸括弧，角括弧を用いて表記された箇所は特に断りの無い限り本稿執筆者による補足や注記を示すものであり原文には無い。訳文の段落区切りは，内容のまとまりを考慮しつつ本稿執筆者が適宜行ったものである。

Ⅰ-1　『キターブ・バフリエ』927年本におけるヴェネツィアの記述（日本語訳）

以下 Bağdat 337（927年本系 66b-68a）に拠る。ほかに Ayasofya 3161，TY 123をはじめとする写本など，本文を持ちかつヴェネツィアの記述部分の全部

オスマン・トルコ語文字翻字基本原則

ء	’（語頭時省略）	ص	ṣ
ب	b	ض	ḍ
پ	p	ط	ṭ , ṭ^{d}
ت	t	ظ	ẓ
ث	th	ع	‘
ج	j	غ	gh , ğ
چ	ch	ف	f
ح	ḥ	ق	q
خ	kh	ک	k , ğ
د	d	گ	g , ğ , ñ
ذ	dh	ل	l
ر	r	م	m
ز	z	ن	n
ژ	zh	ه	h
س	s	و	w
ش	sh	ی	y

または一部が存在する写本を必要に応じて参照している。これらの写本間では異同がしばしば起こっており，本来は校訂をしたのちに翻訳に入るべきものである。Bağdat 337は一瞥するところでは必ずしも最良の写本とは言えないようだが他の写本がより良いとの確証も無い。927年本系写本では，ヴェネツィアについては，Pirânsa/Poreč の章に続けて目立った章立てを挟むことなく続けて書かれる場合（TY 123など）と明確に章立てをして新しい章として書かれる場合がある（Oriental 4131など）。Bağdat 337では章立ては明瞭ではないが，第61章とは区別された内容であることを示す書き方になっている。

［第62章］　本章はウェネディク Wenedik［ヴェネツィア］の都 takht そのものを説明する[3)]。

［Bağdat 337: 66b–68a］

いにしえの時代から世の中の状況についてかく語られている。この町［ウェネディク］の建物が建設される前には，陸地からも海からも流れ寄る川の間で，低湿地 bataqlar[4)] と湿原 sazlıq であり，深かったり浅かったりする所である。ある所は島の形をしていた。

さて ba'dahu，ルーメリ[5)]から不信心者たち kafara がやって来て，今述べたところへ簗を仕掛けていつも魚の漁をしていたと言う。日々の経過とともにこの漁師たちがいささか力が強くなるたびに ziyâdaja qudrat geldikche，漁師たちは数が増え，今述べた所の島のようになっている所へ箱 ṣandıqlar を置かせて，その上に砦 barghuslar のような家々を建てさせ，さて ba'dahu，そこに居た不信心者たちのある者は商売や物作りをしてたくさんの財物 mâl wa manâl を手にし，ある者はまたいにしえからの職に定められており[6)]，彼らの［元のままの］状況に留まっていた。

現在，このようなやり方である，売り買いも行き来も[7)]，要するに，町の中で行われるすべての行動 mu'âmala[8)] は船 gemi とサンダル[9)]を使って行われる。その船長たちは妻，息子や娘，その他の家財と[10)]一緒に夏も冬も船の中にいて，そのうちの水専用の船が陸地 quru からやって来て，［町の人々は］水を買う。ただ ammâ，その水を容れ物を使って船に置くのではない。直に船の中へ移す akhtarırlar。水が必要な者には，秤 ölchek があり，船から突っ込んで daldurup，それでもって売る。魚専用のサンダルは，笊のように穴だらけである。海へと沈んだ[11)]水面で［水面のまま，生け簀のようにして］曳き船する。というのは，この町では死んだ魚を得ることは禁止であるからだ。彼らが捕った魚を，今述べたサンダルで生かしておき[12)]，手を触れさせず[13)]，そうして掬う道具 süzgü でそのサンダルから捉えて売るのだ。

この町の不信心者たちは獅子の姿 shakl［像］[14)] の崇拝者である。自分たち

の腐敗した考えに従って獅子を崇拝する。また yine その理由はこうである。イーサー［イエス］様 Ḥaḍrat–i ʻÎsâ――彼の上に平安あれ――自身の時代以来伝わっている12人の友 yâr［使徒］がいた。彼らの一人ひとりが一つの似姿 ṣûrat を選択していた。皆のうちのひとりがイスカンダリーヤ İskandarîya［アレクサンドリア］で死去して［亡骸はそこに］留まった。彼の似姿は獅子の似姿であった。我々の祖先たち[15]がある方法でそこから［亡骸を］盗んでウェネディクへ持って来て，マールクー Mârqû[16] の教会堂と言って知られる教会堂の中に置き，現在もその教会堂の中に安置されている。その栄誉を讃えて[17]，我々は[18]その町で暮らす gechinürüz［？］。兵隊を集めるために財物を我々が集める[19]時に，彼の名に対して［そのようにし[20]］，来て［は行き[21]］通り過ぎるベイたちは，その財物に干渉して不法に占有できない［？］[22]。

今述べたベイたちは12人のバン ban[23] である。彼らのうちの有力者たちに対して[24]ドゥーズィー dūzī[25] と言うことがいにしえからの習慣である。残りのバンたちは[26]賽子を投げる。当たった［目が出た］者がドゥーズィーとなり，このようにしてやっていく。

さて baʻdahu，もし沖合 deñiz から今述べたウェネディクの町へ船 gemi が到着したいと望むならば，目印は次の通りである。まずマルクー Marqû の鐘楼が見える。その後，残りの町の中が見える。しかし ammâ，次のようにするのが慣例である。ウェネディクから100マイルこちらに一つの町がある。その名をピランサ Piransa[27] と言う。ウェネディクに属する。航行する船 gemi が到着し，そのピラーンサ Pirânsa から水先案内人を得る。進行する。常に測鉛[28]を用いつつ，北西の方角に向かって航行する。海［の水深］を測りながら進む。と言うのは，海岸とその沖合は浅瀬なのである。安楽に進める所ではないのだ。マールクーの鐘楼が目に入ったらそれに向き合って沖合で錨を下す。町の中では，サンダルでまた水先案内人が来る。道案内をして，船を連れて中へと町の前へ導く。外から到着した水先案内人は船を町の中へは入れない。なぜなら，瀬戸 boghaz が様々に開いているのだ。常に一つの瀬戸ではない。［こ

れも］また，いにしえから禁じられている。他の誰も âkhar kimesne 町の前へ水先案内をしない。もしそうしたとすると，毎日瀬戸は安定しているわけではない boghaz bar–qarâr ṭ^{d}urmaz［通れる瀬戸が定まっているわけではない？］。外では船は停泊しない。吹き曝しである。しかるに ḥâl bu ki，風が岸から吹くときは，ひどく波がうねる[29]ので船が壊れる。その解決策はまさに中へ，町の前に到着することである。川に入り込んだように安心することだろう。家々は互いにサンダルで行き来する。散策 sayrân もサンダルに乗ってである。ほかに，散策用にクーンドゥーラ qūndūla[30] と言うチルニク chırnıq[31] のような船を持っている。天蓋をつけて町の中で経巡って，散策する者［客］を探す。この町を 9 万軒ほどの家であると言う。様々の工芸 ṣan‘at の全部が見いだされることは確かである。

さて ba‘dahu，この町の半マイル北東方向に一つの島がある。その島の名をムラーン Murân[32] と言う。ウェネディクの町にどれほどガラス製品 sırcha ishleri があるにしても，その島で作られる。今述べた島の 8 マイル北東側に二つの小島がある。それらの小島の近くで様々の瀬戸がある。塩水や真水の流れである[33]。その二つの小島の一つをマーズー Mâzū[34]，一つをヌールサールー Nūrsâlū[35] と言う。それらの小島の近くであちこちに広がる真水や塩水の流れ ṭatlu ajı ṣular が限りない。互いに合流する。

その 9 マイル北東側に大きな町がある。その町の名はカーワルルー Qâwarlū[36] と言う。ウェネディクから出る船は今述べたカーウルルー Qâwurlū から測鉛を使って進む。そして dakhı，ピラーンサ側へと沖へ向きを変えて通っていく Pirânsa ṭarafına ṣalup gecherler。

さて ba‘dahu，今述べたウェネディクの町の30マイル南西側に港がある。その港をクーラ Kūra[37] と言う。小さな船が到着する。このクーラ[38]［から］[39] ラワーナ Rawâna[40] に至るまで，その海岸は水深の浅い yufka ṣulu 浅瀬である。船 gemi は停泊するに安心ではない。しかし ammâ，先に述べたラワーナは古い城砦 qal‘a である。現在はその城砦はローマ教皇 Rīm–Papa に属してい

る。その城砦の前に一本の流れる大きな川がある。この川からバーザールー Bâzârū の町は南東方向である。バーザールーと我々が言ったのは一つの町である。いにしえの時，ルーメリの帝王の財物 mâl が量られたらしい。バーザールーと言った意味合い ʻalâmat はこれであろう[41]。今述べた所からアンクーナ Anqūna［Ancona］は50マイルである。以上，続く。

Ⅰ-2 『キターブ・バフリエ』932年本におけるヴェネツィアの記述（日本語訳）

以下，主として Ayasofya 2612に基づきつつ932年本系写本に現れるヴェネツィアの記述を訳出する。第92章と第93章が927年本系写本の第62章に概ね対応する。932年本系写本の場合，本文に関して写本相互の異同は927年本系写本に比べると大きくはないが，細かな点については比較検討を要する場合があり，一覧表に掲げた各写本を適宜参照する。

第92章　本章はウェネディク Wenedik 湾の最奥部にある上述の諸城[42]の順序と姿を示す。またカーウルルー Qâwurlû の町[43]の海岸をウェネディクに至るまで［示す］。

［Ayasofya 2612: 210b-211a］

このカーウルルーはウェネディクの浅瀬の中にある町である[44]。その町の 1 マイルだけウェネディク側にサーンタ・カタリーナ Ṣânta Qata-lîna という港[45]がある。この港は浅瀬の中にある。そこへは小さな船 gemi が入る浅瀬であり，ウェネディクの町に近い浅瀬である。その浅瀬の中にリユーンサ Liyûnsa[46] という真水の流れ ṭatlu ṣu がある。この流れへ小さな船が入る。その向こう側，ウェネディク側に島がある。その島をリユーマーズール Liyûmâzûr[47] という。その島から 8 マイルだけウェネディク側に二つの島がある。その島の一方をヌールサールー Nûrsâlû と，他をマーズールブー Mâzûrbū[48] という。そこには瀬戸 boghazlar があり，あるものは塩水で，あ

るものは真水の流れ ṭatlu ṣu である。［その流れは］あちこちへ行く shuña buña gider。この島々の南西側に，即ちウェネディク側にムーラーン Mûrân という島[49]がある。この島から「神に庇護されたるウェネディク Maḥrûsa-i Wenedik」[50] は半マイルである，南西の方角に。しかし ammâ，このムーラーンの島は別の町のようである。ウェネディクから来るガラスの製品はここムーラーンで作られる。かく知られたし。以上。

第93章　本章はウェネディク Wenedik[51] の町 shahr そのものを説明する。

［Ayasofya 2612: 211b-215a］

このウェネディク Wenedik の町の全周は12マイルである。その12マイルのところに，その建物が建てられた，陸地と海から成る潟である。その海の，ある所は浅瀬であり，ある所は深い。その浅瀬である所の上に杭 qazıqlar を打って，その杭の上にこの町を建設したという。建設された理由は次のようである。即ち，以前，この町が建設される前に何も無い所であった時，周辺からかなり多くの漁師の不信心者たち kâfirler が，この［後に］町になった所へ来て簗を仕掛けて，魚の漁をしていた。これらの者たちが魚で儲け，あらゆる所から漁師がここへ集って魚の漁をしていた時，上述の浅瀬の所の上に杭を打ち込んで，その杭の上に家々を建てたという。要するに，こんな風にして長い期間のうちに次第次第に warı warı 上述の不信心者たちが増えて一つの町になる。

この者たちのうちの，見識のある者たち rây ahlları は次のように目論む。即ち，ここは一つの町になったのだから今やここに何かある行為[52]が必要だ，復活の日まで[53]それがゆえにまさにこの町が栄光［栄誉］を見出すような，と言った時，ついには彼らは出かけ，イスカンダリーヤ İskandarîya［アレクサンドリア］にサマールクー Ṣamârqû［San Marco. 聖マルコ］という名の人物の墓があったという。例えば mathalan［即ち？つまり？］，預言者イーサー［イエス］ʿÎsâ Nabî［――彼の上に平安あれ――には12人の仲間 yâr があった。これらすべての者たちを弟子たち ḥawâriyūn[54] と言う――不信心者たち kafara

ṭâʾifası が言うのだが――。「この弟子たちのひとりがサーンタ・マールクー Ṣânta Mârqû［聖マルコ］である」といって，このマールクーをイスカンダリーヤから盗み，「豚の肉だ」と言って箱の中に入れて城砦 ḥiṣâr の門から外へ出して上述のウェネディクの町 shahr へ運んできたという。そこに埋葬してその上に教会堂を建てたらしい。その時から今日まで[55] このマールクーによって自慢している sharaflanurlar。マールクーの財庫，マールクーの城砦 ḥiṣâr，マールクーの船といって［マールクーを］名誉に思っている sabablanurlar。

次のような理由で ol sababdan 他の不信心者たち kuffâr は，このウェネディクのベイたちに対して「漁師［分際］」と言って嘲笑した。というのは，そのベイたちには，元来家系や血筋による帝王はいなかったからである。商売で［ここまで］来ていたのだ。今日，12人のバン ban である。次のような理由で ol sababdan，彼らのうちの有力者 ulular をドゥーズィー dûzî という。12人の頭の意味である。このドゥーズィーが死ぬと賽子を投げて，その幸運にどの者が相応しいか［を示す］賽子の目が出ると，彼を全員の上にベイとして立てる。このようにしてベイ職の［後継の］申し立て daʿawâ を行なう[56]。

しかし ammâ，この町には飲み水は無い。別に水の船を所有している。飲み水を余所から持ってくる。この船の中に女，子供，鶏までもいる[57]。そして飲み水を船倉に注ぐ。桶 gerder でもって，泉［から汲むか］のように満たして doldurup 売る。

さて wa baʿda–hu，この町 shahr の前へウェネディクの船であれ，別の船であれ，如何なるものであろうとも，この町へ行くならば，絶対にパラーンサ城 Parânsa qalʿası[58] から水先案内人を雇わずにウェネディクに行けない。［案内人無しで］行ったとしても禁止されている。もしパラーンサから水先案内人が雇われなかったならば，損害が生じた場合その損害を必ずこの船の人々に弁償させる。以前から習慣はこのようである。というのは，ウェネディクの町の近くにある海岸はすべて浅瀬になった sıghlu 場所であり，海岸に船は到着できないからだ。どんな所であるか測鉛を使って［それに付着する］泥の様子から

判断する。殊のほか低い土地である。陸地に目印は無い。ただ最初にサマールクーの鐘楼が見えるだけである。そのあと町 shahr の諸々の特徴 ‘alâyim が見える。そして到着する。その鐘楼の正面に錨を降ろす。町 shahr からサンダルで別の水先案内人が来る。その船を中の方へ入れる。

さて imdi，ウェネディクの町 Wenedik shahrı へ沖の方から入る瀬戸は，実態は四つの瀬戸である。第 1 に，ちょうど aṣl 町の前にある瀬戸をサーンタ・リバタ Ṣânta Libata の瀬戸[59]という。その瀬戸の両側に二つの塔 burjlar がある。船はその塔の中央を通って中に入る。この塔の沖合側にある浅瀬の通行路に杭を打ちこんである。そこへ到着する船はその杭の外側を進まない。2 本の杭の中央を通る ortasına uğrarlar。その杭の間で停泊する船もある。港 liman［の役割をするところ］である。大索をその杭に結わえる。沖の方へ錨を降ろす。しかし walî，この瀬戸へは非常に大きいカラーカ qarâqalar[60] は入らない。浅瀬 sıgh である。それよりも小さい kichi キョケ kökeler[61] は入る。ウェネディクの町へと，計量所 qapan[62] の前まで[63]行く。

さて wa ba‘dahu，この瀬戸の南西側にまた瀬戸がある。その瀬戸をプールトゥー・ダ・マルーク Pûrtû da Malûq[64] という。小さいバルチャ barchalar[65] が入る瀬戸である。そのさらに南西側にプールトゥー・クーザ Pûrtû Kûza[66] という［瀬戸がある］。まずもって[67]バルチャが入る瀬戸である。その瀬戸から内側，浅瀬の中に sıghlarda 城 qal‘a がある。この城をクーザ Kûza[68] という。この城から，「神に庇護されたるウェネディク Maḥrûsa–i Wenedik」は直線距離で30マイルである，北東に向って。

さて wa ba‘da–hu，このクーザのさらに南西にまた瀬戸がある。この瀬戸をカナールダ・ブールンドゥーラ Qanâlda Bûrundûla[69] という。小さな船が入る瀬戸である。そこから向うは別の国 âkhar mamlakat である。ドゥーカ・フィラーラ Dûqa Firâra[70] という。真水の川 ṭatlu ṣular である。海に来る。流れ込む。それらの［説明の］章になったら，然るべき所で一つひとつ説明しよう。以上。

Ⅱ　記述内容と特色

927年本系写本（Bağdat 337）及び932年本系写本（Ayasofya 2612）に見えるヴェネツィアの記述は以上のような内容であるが，ここに見られる特徴は次のような点であろう。なお，対照しやすいようにほぼ同じ内容を別に表として掲げる（表１）。

Ⅱ-1　927年本系写本

927年本では概ね次のような内容が語られている。

第62章

①元は川の流れ込む低湿地であり，漁をしに来た漁師たちが島のようなところに箱を置いてその上に砦のような家々を建てた。商売で財産を手にするものも現れた。

②売り買いや往来など町なかでのすべての行為が船を使ってなされる。家族と家財を乗せたまま年中船上生活をする者がいる。その中の水専用の船が陸側からやって来て，船に直接貯めた水を量り売りする。死んだ魚を売ることは禁止のため笊のように穴を開けたサンダルを生け簀にして運んで売る。

③人びとはイエスの使徒のひとりマルコを表す獅子の像を崇拝する。マルコの亡骸はアレクサンドリアから盗み出されてこの町に移され，その名で知られる教会堂の中に安置された。

④我々がマルコの栄誉を讃え，兵を集めるために財物を集めることをこの町のベイたちは妨げない［？］。

⑤ベイたちは12人のバン ban であり，最有力者がドゥーズィー dûzî と言われ，誰がドゥーズィーになるかは賽子で決める。

⑥この町の海岸や沖合は浅瀬で危険なため，100マイル手前のピランサ

Poreč/Parenzo で水先案内人を得て，測鉛で水深を測りながら北西に進む。沖合で町の鐘楼が見えたらそこでいったん停泊する。町から別の水先案内人が来て中へと導く。町へ通じる瀬戸の状況は常に変化しているので，外から来た案内人は町の中へは案内しない。また，瀬戸の外は吹き曝しで危険であり，町の前に来るのが安心で良策である。

⑦町の家々の往来や散策にはサンダルやゴンドラを使う。家は９万軒ほどあり，あらゆる職業が営まれている。

⑧半マイル北東にムラーン Murano 島があり，この町のガラス製品はすべてここで作られている。その北東側に二つの小島，さらに北東にカーワルルー Caorle が位置する。

⑨ウェネディクの南西側30マイルにクーラ Chioggia があり，そこからラワーナ Ravenna までは浅瀬である。ラワーナは教皇に属し，その南東方にバーザールー Pesaro があり，そこからアンクーナ Ancona は50マイルである。

Ⅱ-2　932年本系写本

932年本系写本では概ね次のような内容が語られている。

第92章

①カーウルルーはウェネディクの浅瀬の中にある町である。

②ウェネディクとの間に川や島々がある。さらに南西にムーラーンという島がある。

③ムーラーンからウェネディクは南西方向に半マイルで，ウェネディクとは別の町のようである。ウェネディクから来るガラスの製品はムーラーンで作られる。

第93章

①不信心者の漁師たちが潟の浅瀬に杭を打ち，その上に家々を建ててこの町

を建設した。

②12使徒のひとりマルコの亡骸をアレクサンドリアから将来した。豚の肉だと箱の中を偽って運び出し，以後マルコを自慢している。

③由緒ある家系の支配者はおらず，他の不信心者たちに侮られた。12人のバン ban がいて，その最有力者をドゥーズィー dûzî と言う。その者が亡くなると賽子を振って後継者を決める。

④町に飲み水は無く，家族が乗り込んで操る船の船倉に水を積んで外から運んでくる。桶で汲んで売る。

⑤船でこの町に到着するには東の対岸のパラーンサ Poreč/Parenzo で必ず水先案内人を雇う必要がある。ウェネディクの海は水深が浅くまた陸地の目印も無くて危険であるからだ。鐘楼の正面まで進むと今度は町の方からサンダルで別の案内人が来て中へと導く。

⑥沖から町に入っていく瀬戸は4箇所ある。北東から南西へサーンタ・リバタの瀬戸（沖側に航路を示す杭が打たれている），プールトゥー・ダ・マルークの瀬戸，プールトゥー・クーザの瀬戸，カナールダ・ブールンドゥーラの瀬戸の順に並ぶ。最後の瀬戸の向こうはフィラーラの国である。

両者を比べてみると基本的に共通した内容であるが，異なる点にも気づく。

（1） 両系統で内容が食い違う主な点

1）ラグーンで家々の基礎に用いられたのが，927年本では箱，932年本系では杭となっている。

（2） 927年本でのみで言及される主な事柄

1）死んだ魚を売ることは禁止であり，生きたまま魚を売るためのサンダルがあること。

2）我々がマルコの栄誉を讃え，兵を集めるために財物を集めることをこの町のベイたちは妨げない［？］。

3）日常用の乗り物としてゴンドラがある。

表１　ヴェネツィアに関する記述の対照

（下線部はそれぞれの系統における主な独自内容を示す）

927年本系写本	932年本写本
【第62章】 ①元は川の流れ込む低湿地であり，漁をしに来た漁師たちが島のようなところに箱を置いてその上に砦のような家々を建てた。商売で財産を手にするものも現れた。 ②売り買いや往来など町なかでのすべての行為が船を使ってなされる。家族と家財を乗せたまま年中船上生活をする者がいる。その中の水専用の船が陸側からやって来て，船に直接貯めた水を量り売りする。死んだ魚を売ることは禁止のため笊のように穴を開けたサンダルを生け簀にして運んで売る。 ③人びとはイエスの使徒マルコを表す獅子の像を崇拝する。マルコの亡骸はアレクサンドリアから盗み出されてこの町に移され，その名で知られる教会堂の中に安置された。 ④我々がマルコの栄誉を讃え，兵を集めるために財物を集めることをこの町のベイたちは妨げない［？］。 ⑤ベイたちは12人のバン ban であり，最有力者がドゥーズィー dûzî と言われ，誰がドゥーズィーになるかは賽子で決める。 ⑥この町の海岸や沖合は浅瀬で危険なため，100マイル手前のピランサで水先案内人を得て，測鉛で水深を測りながら北西に進む。沖合で町の鐘楼が見えたらそこでいったん停泊する。町から別の水先案内人が来て中へと導く。町へ通じる瀬戸の状況は常に変化しているので，外から来た案内人は町の中へは案内しない。また，瀬戸の外は吹き曝しで危険であり，町の前に来るのが安心で良策である。 ⑦町の家々の往来や散策にはサンダルやゴンドラを使う。家は９万軒ほどあり，あらゆる職業が営まれている。 ⑧半マイル北東にムラーン島があり，この町のガラス製品はすべてここで作られている。その北東側に二つの小島，さらに北東にカーワルルーが位置する。 ⑨ウェネディクの南西側30マイルにクーラがあり，そこからラワーナまでは浅瀬である。ラワーナは教皇に属し，その南東方にバーザールーがあり，そこからアンクーナは50マイルである。	【第92章】 ①カーウルルーはウェネディクの浅瀬の中にある町である。 ②ウェネディクとの間に川や島々がある。さらに南西にムーラーンという島がある。 ③ムーラーンからウェネディクは南西方向に半マイルで，ウェネディクとは別の町のようである。ウェネディクから来るガラスの製品はムーラーンで作られる。 【第93章】 ①不信心者の漁師たちが潟の浅瀬に杭を打ち，その上に家々を建ててこの町を建設した。 ②12使徒のひとりマルコの亡骸をアレクサンドリアから将来した。豚の肉だと箱の中を偽って運び出し，以後マルコを自慢している。 ③由緒ある家系の支配者はおらず，他の不信心者たちに侮られた。12人のバン ban がいて，その最有力者をドゥーズィー dûzî と言う。その者が亡くなると賽子を振って後継者を決める。 ④町に飲み水は無く，家族が乗り込んで操る船の船倉に水を積んで外から運んでくる。桶で汲んで売る。 ⑤船でこの町に到着するには東の対岸のパラーンサで必ず水先案内人を雇う必要がある。ウェネディクの海は水深が浅くまた陸地の目印も無くて危険であるからだ。鐘楼の正面まで進むと今度は町の方からサンダルで別の案内人が来て中へと導く。 ⑥沖から町に入っていく瀬戸は４箇所ある。北東から南西へサーンタ・リバタの瀬戸（沖側に航路を示す杭が打たれている），プールトゥー・ダ・マルークの瀬戸，プールトゥー・クーザの瀬戸，カナールダ・ブールンドゥーラの瀬戸の順に並ぶ。最後の瀬戸の向こうはフィラーラの国である。

4）家が9万軒ほどある。

（3） 932年本のみで言及される主な事柄

1）マルコの亡骸を豚の肉と偽った。

2）由緒ある家系の支配者がいない。

3）沖から町に入る瀬戸が4箇所ある。

927年本と932年本の全体的な共通性や相違点の考察は興味深い課題であり，このヴェネツィアの記述の共通点や相違点もその意味で大いに関心を惹かれるところであるが，ここではそれぞれの写本系統に見られる個々の事柄の確認にとどめ，詳細な検討には立ち入らない。なお，上にあげた相違点のうち，（2）-2）はピーリー・ライースがヴェネツィアを実地に見ているかどうかにも関わり重要な点であるが，本稿筆者の力不足により文意を十分に掴めず，考察を留保せざるを得ない。この点もあわせて他日を期したい。

さて，ヴェネツィアについてこのように具体的な記述が見られるが，『キターブ・バフリエ』の927年本，932年本いずれにおいても町や港あるいはその周辺地域の地理や歴史を説明することはしばしば行われており，特段珍しいことではない。しかし，上のように町の創建の歴史に始まって現在の模様に至るまでその特徴が多方面にわたって詳しく説明されている例は多くはない。アドリア海の他の都市・諸港の説明と比べても，ヴェネツィアに関する記述内容は具体的で豊かであり，その扱いの特異さが強く感じられる。『キターブ・バフリエ』においてヴェネツィアに特段の関心が払われていることが知られる。

なお，ヴェネツィアに関する情報の源，出所についてピーリー・ライースはどちらの系統においても何も述べていない。語り口の「柔らかさ」から察すると船乗り仲間からの口頭の情報であった可能性も考えられようが，自身の実地の見聞に基づく情報の可能性も含めて，断定的なことは何も言えない。

Ⅱ-3『キターブ・バフリエ』写本本文におけるヴェネツィアの特異性

Ayasofya 2612で見た通り，ヴェネツィアとその周辺は『キターブ・バフリエ』932年本では第92章と第93章で直接的に説明されている。一方で，他の区域に関する叙述（章）の中でもヴェネツィアはしばしば言及されており，その点が『キターブ・バフリエ』におけるヴェネツィアの大きな特徴であろう。927年本の場合については証拠立てた議論は別の機会に譲るが，少なくとも932年本の場合はエーゲ海域や，ダルマツィア海岸を含むアドリア海域といった海域に関わる章においてもヴェネツィアへの言及の例を多く拾うことができる。試みに当該の地域や所在の都市・城砦などがヴェネツィアに属する旨を示す文言を Ayasofya 2612で辿ると少なくとも31の章でその例を確認できる。同様の例を他に探すと，次いで多いのがイスパーンヤ/スペインに関する15章，３番目がトゥーヌス/チュニスに関する４章であり，言及される頻度はヴェネツィアとは明らかに差があると言えよう。

ヴェネツィアへの言及の背景には，ヴェネツィアが『キターブ・バフリエ』編纂当時，アドリア海域を拠点に盛んに地中海東部で海上活動を行っていたことがあるに違いない。そのことはオスマン朝艦隊に関わる一員であったピーリー・ライースにとって――ひいてはオスマン朝当局にとって――関心を向けざるを得ない事態であったに違いない。『キターブ・バフリエ』，とりわけ932年本におけるヴェネツィアへの頻繁な言及は際立っており，ヴェネツィアは『キターブ・バフリエ』において特異な扱いが見られる都市あるいは国家であると言えよう。ピーリー・ライースによって『キターブ・バフリエ』で示されたこのようなヴェネツィアへの関心の大きさは，ヴェネツィアが――少なくとも地中海東部に関する限り――その動向に大いに注目せざるを得ない存在であったことを確かに裏付けていると言えよう。

Ⅲ　『キターブ・バフリエ』写本の付図に見えるヴェネツィアの特異性

ここまで927年本と932年本両系統の写本本文の内容を中心に検討してきたが，諸写本に付されている付図（絵地図）の特徴をあわせて確認しておく。ヴェネツィアの章の付図についてはかつて多少言及したことがある［新谷2000］。そこでの作業は各写本の特徴や写本相互の関係を探るための手掛かりを得ることを主たる目的としており，『キターブ・バフリエ』におけるヴェネツィアの図の比重，ピーリー・ライースがヴェネツィア図に込めた本来的な意味合いを考えようとしたわけではなかった。

Renda は，Ayasofya 2612及び Hazine 642（ともに932年本系）に基づきつつ，『キターブ・バフリエ』における付図をヨーロッパに原型を辿れるものとピーリー・ライースの直接の見聞に基づくものに大別したうえで，前者の例としてヴェネツィアの図を取り上げて，見開き2ページに亘ることを含めて多くの注目すべき点を取り上げている［Renda 1992: 282］[71]。また，Soucek や Ülkekul による，写本系統による付図の違いや発展の模様，個々の付図に基づく描写内容の分析を中心にした概略的あるいはある程度踏み込んだ言及がある［Soucek 1992/96: 124, 141–149; Ülkekul 2007: 621–622, 756–757, Ülkekul 2015d など］。それらを踏まえつつここでは『キターブ・バフリエ』におけるヴェネツィア図の比重の観点から考察する。

Renda がすでに指摘している通り，Ayasofya 2612ではヴェネツィアの図は見開き2ページ（214b–215a）に亘って描かれている。手許の932年本系写本（地図のみの写本を含む）を確認すると，MC Yz O–30が1ページのみの地図[72]を載せている以外，いずれの写本でもヴェネツィアの図は見開き2ページで描かれており，ほかに932年本系写本において見開き2ページを使って描かれているのはアレクサンドリアのみである[73]。いくつかの都市や港，大きな島全体を一目で見渡すように広範囲を見開き2ページで描いている例はあるが，一つの都市に焦点を絞って見開きで描くという例はこれら2都市に限られてい

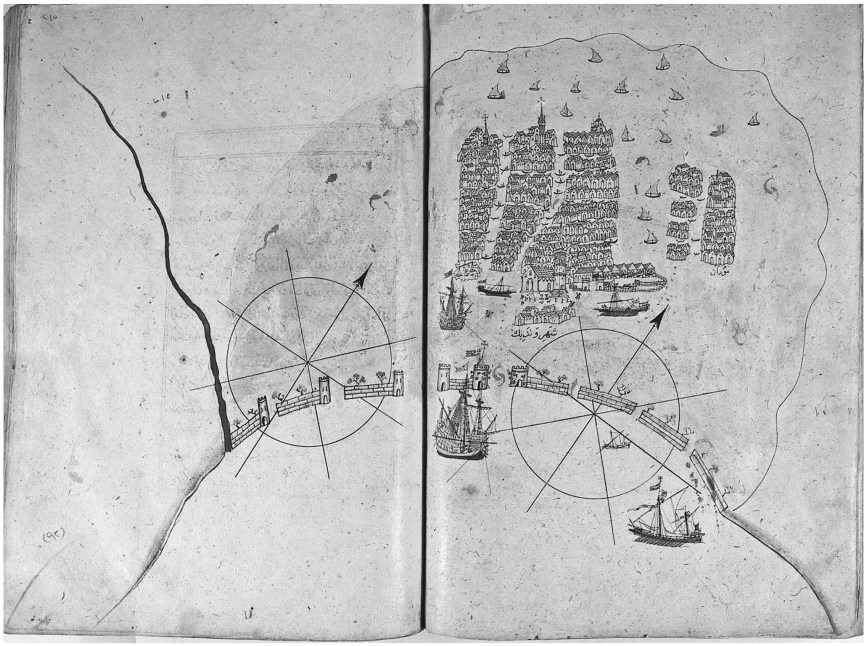

図１　ヴェネツィア図（Ayasofya 2612: 214b–215a）

る。その意味でここでもヴェネツィアは破格の扱いを受けていることになる。しかも，Ayasofya 2612の例で見ると，素朴で略図的とは言え，運河の様子や鐘楼（カンパニーレ），聖マルコ大聖堂と広場，造船所などがそれと明確に分かる筆致で丁寧に描き込まれている。Ayasofya 2612もピーリー・ライース自らがまとめた原本ではなく後世に制作された写本であるからには，その付図から多くを読み取ろうとしすぎることは避けねばならないが，他の写本においても同様の状況が見られることに鑑みて，付図は原本成立時点においてAyasofya 2612に見られる特徴をすでに備えていたと考えてもよいのではないだろうか。少なくとも後世の写本作成者（付図作製者）たちは，ヴェネツィア図にピーリー・ライースが込めた意図，ヴェネツィアの重要性を理解しつつ

『キターブ・バフリエ』の写本作成に勤しんだに違いない。

927年本の場合，一つの都市に焦点を絞りつつ見開きで描くという例を手許の写本に求めると，Coğrafya 1, Hüsrev Paşa 272の2写本でヴェネツィアの見開き図が確認され，また927年本系と分類されているMSS. 718（地図のみで本文無し）及びDiez A. Foliant 57ではヴェネツィアの見開き図に加えてカイロ，イスタンブルの見開き図が確認される[74]。927年本系写本ではこれら以外には一つの都市に焦点を絞った見開きの図の例は見いだされない。ヴェネツィアについては言えば4写本に見開き図があることになる。わずか4例に過ぎず，それらをもって多くを語ることは適当ではないが，927年本系写本においてもヴェネツィアへ特別な関心を見て取ることができるのかもしれない[75]。

Ülkekul 2015d: 92では，それぞれの写本の付図の内容の説明を終えるにあたって「いかなる国もトルコの航海者たちほどヴェネツィアの町に重きを置かず，［また彼らは他の］いかなる町に関してもこれほど多くの絵図を描いて歴史に遺産を残さなかった」と述べて，ピーリー・ライース及び写本作成者たちのヴェネツィアへの関心に注意を促している。彼らの関心の大きさが，付図の描写手法や内容の多様性によく表れていると言うのであろう。一方で，付図の大きさ（見開き描写）の点でもヴェネツィアの持った特別な意味合いを指摘できよう。

このように，ヴェネツィアは『キターブ・バフリエ』の本文の説明においても（とりわけ932年本の場合），また付図における描写の面でも（両系統とも）特異であり，そのことからピーリー・ライースがこの町を地中海各地の都市・地域の中でも特別に重要と考えていたと見做してよいであろう。もとより『キターブ・バフリエ』，特に932年本は地中海各地を必ずしも満遍なく均等に説明している書物ではなく，叙述に精粗・濃淡が見られるが［新谷 1990a］，それでも叙述量や付図の描写内容はある程度の振れ幅に収まっている。その中にあってヴェネツィアは特別な比重と意味付けを与えられていると言えよう[76]。

おわりに

ヴェネツィアは『キターブ・バフリエ』において編者ピーリー・ライースが特別の関心を向けた町であった。町自体の姿への関心が大きいこともさることながら，この海洋国家が展開している海外事業への関心――それはむしろ警戒であったかもしれない――も大きかった。『キターブ・バフリエ』932年本について言えば，地中海全体，あるいは本稿では全く触れなかった，韻文序で書かれている地中海の外の世界への関心を広く持ちながら，アドリア海の都市国家ヴェネツィアにピーリー・ライースが向けた眼差しはとりわけ深かった。そこには，オスマン朝が地中海，わけても東地中海域で覇権を目指していた16世紀前半という時代にあって，オスマン朝の海上活動，海軍の展開を担うひとりであったピーリー・ライースの意識が反映している。『キターブ・バフリエ』は，広く航海者たちに役立つ彼らのための書物に違いなかったが，ピーリー・ライースが自らの関心の赴くところを表現し，スルターンや当局の有力者に伝える手段たる書物であったことも確かであろう。

注

1）『キターブ・バフリエ』に関する研究状況の概略については新谷 2021などを参照されたい。なお，写本原文はオスマン・トルコ語で書かれている。

2）筆者（新谷）が手許で参照できる写本を主体にした写本一覧を別に掲げる。必ずしも知られている写本すべてが網羅されている訳ではない。なお，927年本系写本のうち，Bodleian Library（Oxford）所蔵の写本の記号は正しくは MS. D'Orville 543である。これまで発表した論考において筆者の不注意により誤った表記をした場合があるがここで訂正する。また従前の論考で使用した写本記号に容易に辿りつける範囲で記号表記を改めた写本もある。なお，Eb 389（927年本系）及び Revan 1633（932年本系）はヴェネツィアおよびその近辺に関する叙述を含む部分を欠いており，本稿では考察対象外である。

3）ヴェネツィア関係部分の章題は Bağdat 337では書かれていない。ここでは Oriental 4131に拠る。

4）Bağdat 337をはじめとして比較的多くの写本で يتاقلر とあるが，別の9写本（Supplément turc 220, Oriental 4131, 990, TY 123, 2997, Or. Fol. 4133, Ayasofya 3161,

Hüsrev Paşa 272, Yeni Cami 790）では بتاقلر（低湿地，沼地）とある。文脈上 بتاقلر がより適当と考える。

5）Rûm–eli は通常ヨーロッパ側のオスマン朝領（あるいは，オスマン朝領となるべき所）を指すとされ，『キターブ・バフリエ』におけるピーリー・ライースの用法も概ねそう考えてよいと思われる。新谷 2021: 27–28 n. 63参照。

6）Bağdat 337では muqîr olup とあり，他の写本でも同様の表記が多い。muqarr や muqayyad とする写本もあるが，Hamidiye 945, Deniz Müzesi 987にあって最も文脈に沿うと思われる muqarrar olup をここでは採る。

7）المقده وصتمقده ورمكده و كلمكده كتمكده とある。صتمقده に加えて，あるいはそれに代わって ورمكده が書かれているのは Bağdat 337はじめ12写本であり（MS. D'Orville 543, MS. 3613, Oriental 4131, 990, 172, 2997, H. O. 192, Or. Fol. 4133, Ayasofya 3161, Ayasofya 2605, Yeni Cami 790, Bağdat 337），ほか10写本では書かれていない。Diez A. Foliant 57では該当部分が欠けている。

8）مقامله とあり MS. D'Orville 543と MS. 3613でも同様であるが，その他の写本の معامله を採った。

9）şandal–lar. サンダル şandal は曳航や船上での運搬に大きすぎない手漕ぎのボート［Soucek 1992/1996: 18］。

10）wa sâ'ir/sâyir asbâb ile. Ayasofya 3161には無く，H. O. 192は sâyir athwâbları ile とするが，他の諸写本は Bağdat 337と一致している。

11）ياتمش とあり，MS. D'Orville 543, MS. 3613, Ayasofya 3161でも同様であるが，その他の殆どの写本では باتمش とある（MS. 3612では باتمشدر。LNS 75 MS は判読が難しい）。

12）صنداللردن طوتب طقلايوب とあり MS. 3613でも同様であるが，Oriental 4131ほか 7 写本（990, 2990, 2997, Or. Fol. 4133, Ayasofya 3161, Ayasofya 2605, Yeni Cami 790）では صنداللرده صقلايوب とあり，文脈上これが適切と考えた。

13）... ال دكورمزلردكه سوزكوسيله とある。دكه は他の写本では تكه（Oriental 4131 他）や تاكه（Yeni Cami 790のみ）とあるほか，書かれていない場合（Supplément turc 220他）もある。ここでは Yeni Cami 790の تاكه を採った。

14）守護聖人聖マルコを表す有翼の獅子を指すのであろう。注16参照。

15）Supplément turc 220, 987, Hamidiye 945, Hamidiye 971, Hüsrev Paşa 272, LNS 75 MS の 6 写本で kendü ajdâdına と，MS. 3612, TY 123の 2 写本で kendü ajdâdlarından とある。Bağdat 337を含む14写本が bizüm ajdâdımız としており，本文の以下の記述も考慮してひとまずこれを採るが，「我々」が誰であるのか検討を要する。この点については注19を参照。

16）San Marco. 聖マルコ。有翼の獅子がその象徴とされる。伝説ではアレクサンドリアで布教し殉教したとされ，遺体が 9 世紀にアレクサンドリアで発見され，ヴェネツィアに

運ばれたと言われる。ヴェネツィアでは亡骸を納めるべく9世紀にサン・マルコ大聖堂が設けられ，大聖堂は火災と再建を経て11世紀に現在の建物の礎が置かれた。聖マルコは聖テオドロスに代わってヴェネツィアの守護聖人となり，ヴェネツィアの文物にはマルコやその象徴である獅子がしばしば登場する。本文の逸話は9世紀前半以来の伝承に概ね沿った内容である。

17）sharafına. 手許の写本では Bağdat 337のほか MS. D'Orville 543, MS. 3613, 172, H. O. 192の4写本で ṭarafına とあり，2990では判読しづらいが ṭarafına であると思われる。その他の16写本では sharafına とあり，文脈上 sharafına がより適当と解した。

18）手元のすべての写本で biz de とある。

19）手元のすべての写本で jam' eyledümüzde とあり，行為の主体が「我々」であることが示されている（一部の写本では jam' を欠く）。この「我々」がピーリー・ライース自身を含む人々を指すとすると，ピーリー・ライースが927年本成立時点（1521年）でヴェネツィアを実地に訪れていたことを強く示唆することになる。しかし，この章の末尾近くで Chioggia をクーザ Kūza ではなくクーラ Kūra としている写本がほとんどであることから，ピーリー・ライースは音を認識していない，すなわち927年本成立時点（1521年）では現地に立っていないとも思われる（注37参照）。あるいは，他者から口頭の情報を得ていたとすると話者の語り口をそのままに書き記したとも考えられる。

20）2990でのみ anuñ adına の後に ederüz wa が入っている。

21）Supplément turc 220, MS. 3612, 987, 990, TY 123, Hamidiye 945, Hamidiye 971, Hüsrev Paşa 272, LNS 75 MS の9写本では gelüp の後に giden wa が入っている。いずれも ṭarafına ではなく sharafına とある16写本に含まれる。

22）上の注で示した点も勘案して次のように読んだが，正確な文意を取りにくい。Anuñ **sharafına** biz de bu shahrda gechinürüz. 'Askar jam' etmek–ichün mâl wa manâl jam' eyledüğümüzde anuñ adına gelüp **gidüp wa** gechen beğler ol mâl wa manâllara dakhl edüp nâ ḥaqq yere taṣarruf edemezler. なお，この箇所に相当する部分の訳は Ülkekul & Can 2007: 105 及び Ülkekul 2015d: 28には無い。またこのくだりは932年本系写本では現れない。

23）ban は，南スラブ語で諸侯に与えられた称号の意とされる［Sertoğlu 1986: 33］。ここでは「十人会（十人委員会）」を指しているか。「十人会」には定員枠外追加委員がいたようである［永井 1994：179，255］。

24）Bağdat 337, 2990, MS. D'Orville 543, MS. 3613では اولارینه, H. O. 192では اولرینه（ewlerine 家に対して？）とある。他のすべて写本では ulularına と読める。

25）ドージェ doge（統領）。ラテン語 dux（案内人，指導者，支配者などの意）に由来する称号。なお，12は現代イタリア語では dodici。

26）Ayasofya 3161 及び Oriental 4131, 990, Coğrafya 1, 2997, Or. Fol. 4133, Ayasofya 3161,

Ayasofya 2605, Yeni Cami 790の 9 写本では，ここに続けて「そのバンの下で席を占める。もし上述のドゥーズィーが死ぬとそのバンたちは」とある。

27）Poreč/Parenzo. イストリア半島西岸の港町。ヴェネツィアから東にアドリア海を越えた対岸にあたる。

28）測鉛は水深の計測に用いられるが，船の流れる方向の確認など，いろいろな目的で使用される。測鉛の底に獣脂などを詰めておき付着した砂泥などによって底質を知ることもでき，また測鉛が海底に当たって発する音からも底質を知ることができる。

29）صورلغان とある。MS. 3612, Coğrafya1, 2997, H. O. 192では صولغان，990では صولوغان とある。Karayazgan 1981: 116の“soluğan”の項には，「風 rüzgâr や長い間同じ方向から吹いた季節風 meltem の後に始まる波の動き」とあり，これを採った。なお，Ülkekul は「嵐の後でごく希に海岸に打ち付ける激しい波」と説明している［Ülkekul 2015d: 28, fn. 10］。

30）ゴンドラを指す［Kahane & Tietze 1958: 254］。

31）小型船の一種。Karayazgan 1981: 24では，１．高さの低いボート，２．１本マストで船首三角帆を持つ帆船，とある。Redhouse 1890/1974: 719ではドナウ川で用いられたボートあるいははしけの一種，Redhouse 1974: 252ではドナウ川で用いられたボートの一種，としている。

32）Murano 島。ヴェネツィアの章の直前（Bağdat 337: 66b3）にここからヴェネツィアまで半マイルとの記述がある。

33）Bağdat 337: 67b では「中は真水の流れである ichi ṭatlu şular」とある。この前後の内容が Bağdat 337と一致ないし酷似していることが確認できる他の12写本のうち，２写本（MS. D'Orville 543, MS. 3613）では同様に解しうるが，その他10写本のうち 9 写本では「塩水や真水の流れである ajı wa ṭatlu şular」と読むことができ，それに拠った。あと１写本（2990）では「あるものは塩水の，またあるものは真水の流れである kimi ajı kimi ṭatlu şulardır」とある。また，前後の内容が Bağdat 337と一致しない 8 写本でも 1 写本（H. O. 192）を除いて ichi ではなく ajı と解される。

34）のちにみる通り，932年本系写本である Ayasofya 2612ではマーズールブー Mâzûrbû とある。ヴェネツィア本島から東北方 8 km に位置する Mazzorbo 島であろう。Pedani も，Ökte 1988を参照しつつ Mazorbo［Mazzorbo］としている［Pedani 2015: 321］。注48参照。

35）確認できる限り，手許の927年本系及び932年本系すべての写本で Nûrsâlû نورسالو とある。Pedani は Ökte 1988 を参照しつつ Torcello としている［Pedani 2015: 321］。Tûrsâlû تورسالو と記すべきところを語頭の文字 t（ـذ）を n（ـذ）と誤って記したのであれば Torcello 島の可能性が高い。これもピーリー・ライースが耳で音を確認していない（現地に赴いていない）証左とも考えられよう。注37参照。

36）ヴェネツィアの東北東約50 km の海岸に位置する Caorle であろう。直前に述べられた二つの島を含めてこの辺りの叙述内容は Ayasofya 2612など932年本系写本では第92章で言及されている。

37）本来，Ayasofya 2612を始めとする932年本系写本にあるように，Kūza/Chioggia であろう（注68参照）。手許で確認できる限り，Kūz/Kūn ないしは Kūza/Kūna に見える Ayasofya 2605及び，Kūna に続いて Kūza が現れる990の例はあるものの，続いて言及される 2 例とも Kūza とある927年本系写本は無い。このように927年本系写本のほとんどで Kūz/Kūza と明確に認識されていないことから，音で確認した（即ち，耳で聞いた）地名ではないように思われ，ピーリー・ライースが927年本成立の時点（1521年）までに現地を訪れてはいないことを思わせる。932年本作成時点（1526年）では現地で確認できたか，あるいは Kūza の音を記した文献に拠ったと思われる。注35参照。

38）990では Kūza とある。明確にそのように読める唯一の例である。

39）Hamidiye 945: 30b24に Kūra-dan とある。唯一の例である。

40）Ravenna であろう。

41）Ravenna 南東約80 km に位置する Pesaro のことであろう。932本系写本では第97章で説明されており，財物を量る件も次のように言及されている。「このパーザルー Pâzarû の町についてこんな風に言われている。昔，不信心者のベイがいた。すべてのフランクの国 Afranj mamlakatı をそのベイが支配していた。あちこちからの財物 mâl をこの町で秤にかけて量って，それからその財物を取り立てていた ḍabṭ eyler imish。この町をそういう理由で「秤の町」と言っていたという。」［Ayasofya 2612: 218b5-8］Ökte 1988: 941 補注*では，ピーリー・ライースは Pesaro の名称をイタリア語 pesare（量る）に帰している，と指摘している。

42）第91章末尾に予告的に言及されているカーウルルー Qâwurlû とウェネディク Wenedik を指しているのであろう。

43）ヴェネツィアの東北東約50 km の海岸に位置する Caorle であろう。注36参照。

44）実際にはヴェネツィア本島周辺のラグーンに位置するのではなく，東北東約50 km の海岸に位置する。

45）不詳。Pedani は Ökte 1988を参照しつつ Santa Margherita? としている［Pedani 2015: 321］。Caorle の 2 km ほど南西（ヴェネツィア側）の海岸に Porto Santa Margherita があり，Livenza 川がアドリア海に流れ込む。

46）上の注45の Livenza 川であろう。Pedani も Ökte 1988を参照しつつ Livenza としている［Pedani 2015: 321］。

47）Caorle からヴェネツィア本島方向約30 km に位置する Lio Maggiore であろう。Pedani も Ökte 1988を参照しつつ Lio Mazor［Lio Maggiore］としている［Pedani 2015: 321］。ヴェネツィア本島からは東北東に約20 km。

48）ヴェネツィア本島から東北方 8 km に位置する Mazzorbo 島であろう。Pedani も，Ökte 1988を参照しつつ Mazorbo［Mazzorbo］としている［Pedani 2015: 321］。注34参照。
49）Murano 島。注32参照。
50）Ayasofya 2612では，このような maḥrûsa-yi …という表現は，ヴェネツィアに関して 2 回，グラナダに関して 1 回，計 3 回現れる。
51）Ayasofya 2612のここでの母音符号に従えば Wendik とすべきか。
52）ish. Soucek は，書写生が原文を損なった可能性が高いとして keşiş/kashîsh（priest）や aziz/ʿazīz（saint）のような言葉として読み取るべきと述べる［Soucek 1992/1996: 168, n. 5］。しかし，手許で確認できる写本すべてにおいて明瞭に ish とあり，書写生の責任にのみ帰するのはためらわれる。
53）Ayasofya 2612と Hazine 642では tâ qiyâmat-a-dan とあるがその他の写本にある通り tâ qiyâmat-a-dek と解する。ただし，Deny はそのオスマン語文法書刊行当時（1921年）トルコ語を話すサロニカの人びとの言語において「…まで」の意で -a-dan/-e-den が使われていると述べる［Deny 1921: 613］。-a-dan/-e-den がもともとピーリー・ライースの馴染んでいた形ならば，Ayasofya 2612と Hazine 642は原本に近い写本であろうか。
54）使徒。ここでの綴りは هواريون とあり，Hazine 642も同様。その他の写本では正しく حواريون と綴られている。
55）Ayasofya 2612と Hazine 642では tâ bu zamân-a-dan とあるがその他の写本に従い tâ bu zamân-a-dek と解する（MC Yz O-30では tâ bu zamân-dek とある）。注53参照。
56）確認できるすべての写本で دعواسن(دعواسين) ايدرلر とある。دعوا が دعوة の意図であれば，招聘を行なう，の意か？ Ökte 1988: 897では“Böylece beylik işini sürdürürler”，“This is how they determine the succession.”と訳しており，Soucek は“This is their system of government.”とする［Soucek 1992/1996: 141］。また Ülkekul は böylece beylik sorununu çözmüş olurlar（このようにベイ職の問題を解決している）とする［Ülkekul 2015d: 40］。
57）船の家の中で家族が生活を営んでいる，の意か。
58）Poreč/Parenzo. 注27参照。932本系写本では第84章で説明されている。
59）Bausani は Santa Elisabetta とする［Bausani 1990: 20］。Lido 島に位置する Santa Maria Elisabetta を言うのであろうか。当時の Lido 島の様子が今日と違っていたとすれば，Santa Maria Elisabetta のあたりが通航路になっていたか。あるいは今日の Porto di Lido に相当するか。
60）カラーカ qarâqa は非常に大型の商用帆船を指す［Soucek 1992/96: 15］。
61）キョケ köke について Soucek は「イタリア語の cocca に由来する借用語であり，ドイツ語の kogge（ハンザ同盟の北海艦隊の 1 本マストの横帆船）に遡る。…中略…ピーリー・ライースの時代までにはイタリア語では cocca の語は廃れていき，ピーリー・ライース

自身は異教徒の使う大型の船という一般的な意味で用いているが，それもめったに使わない」と説明する［Soucek 1992/96: 15, 18］。Ayasofya 2612での使用はここを含めて3例のみ確認でき，他の2例では「カラーカ，すなわち大きなキョケ」［Ayasofya 2612: 83a2］，「カラーカ，すなわち非常に大きなキョケ」［Ayasofya 2612: 284a10］と述べられている。キョケは小型のカラーカを指すことになり，ここでは比較的小型の船ほどの意か。

62）市場を指すとすればリアルト橋の辺りか。リアルト橋の近辺は13–15世紀には取引，金融の中心になっていたという。Soucek は税関と解している［Soucek 1992/96: 141］。Bausani は特に訳していないようである［Bausani 1990: 20］。Hazine 642に拠っているÜlkekul は Kabban，Kebban と読み，ペルシア語の kepan からアラビア語化したと述べたうえで，「重量物の計測に有用な天秤 terazi，秤 baskül，公設大型計量器 kapan のこと。kapan はまた別に，取引物が集荷，検査，徴税，配送される場所を指す。専門的に取引される商品により un kapanı や yağ kapanı のような名称が思い浮かぶ」と説明している［Ülkekul 2015d: 40, fn. 20］。

63）Ayasofya 2612と Hazine 642では öñü–ne–den とあるが他の写本にある通り öñü–ne–dek と解する。注53参照。

64）Ayasofya 2612以外のすべての932年本系写本で Pūrtū da Malamūq とある。Porto di Malamocco と思われる。Bausani 1990: 20, Soucek 1992/96: 141でも Malamocco と解されている。

65）バルチャはどっしりとして背の高い，横帆装備の商船。しばしば，大きさや特性に関わらず単に帆で航行する商船の意で用いられる［Soucek 1992/96: 15］。

66）Porto di Chioggia であろう。Bausani も Chioggia と解し［Bausani 1990: 20］，Soucek は Gozzo としている［Soucek 1992/96: 141］。

67）awwalda. 第一に，あるいは，他を措いて，とすべきか。Ülkekul は eskiden（かつて）としている［Ülkekul 2015d: 40］。

68）Chioggia であろう。注66参照。

69）Bausani 1990: 20では canale di Bròndolo（*qanal de Borodole*）としている。Chioggia 南方，Brenta 川の河口部に位置する集落 Brondolo に関係する名であろう。Soucek 1992/96: 141では Kanal da Bornola と読んでいるが932年本系写本のいずれにおいてもそのように解しにくい。Ökte 1988: 903では Brentalle とする。

70）Ferrara 公（国）であろう。

71）Renda は，ピーリー・ライースの直接の見聞に基づく図としては北アフリカやアナトリア半島南岸部の都市の図に言及し，アランヤ Alanya の図を最も精緻な図として取り上げている［Renda 1992: 284］。

72）1ページの中では，地図そのものも題目の文字（شهر وندیك）や解説文なども垂直にかか

れており，時計回りに90度回転して見るように描かれている。当該の写本においはそのような描写・配置の図は他に見られないことを考えると，写本作成時の手本の中の（あるいは別途用意した）見開き2ページの図を1ページの大きさに縮小して写し，反時計回りに90度回転させて収めたようにも見える。その意味で，本来見開きで描かれた図が収められるべきであったように思わせる。ただしこれは推測の域を出ない。

73）見開きで描かれたアレクサンドリアを確認できるのは手許の写本ではSupplément turc 220, 171, Ayasofya 2612, Hazine 642, Revan 1633, MC Yz O-30の6写本であり，1写本を例外として他のすべての写本で見開きで描かれるヴェネツィアとはいささか事情が異なる。

74）MSS. 718を927年本系写本と考えるにはためらいがあるが，ここではÜlkekul 2007で行われている分類に従っておく。また，Diez A. Foliant 57ではカイロ図（25a，25b），イスタンブル図（28a，28b）が見開き図であり，ヴェネツィア図（36c）は本来見開き図であったはずが，落丁など何らかの理由により右ページが欠けた状態と思われる。

75）なお，これらの4写本のヴェネツィア見開き図は相互によく似た印象を与える図である。また，Ülkekul 2015d: 56-64でも指摘されている通り，Coğrafya 1は印象の異なる1ページ分のヴェネツィア図も併せ持ち，これを含めてヴェネツィアについて3図が添えられている特異な写本である。Hüsrev Paşa 272も見開きのヴェネツィア図の直後にヴェネツィアが小さく描き込まれた広域の地図が続き，見開きのヴェネツィア図は別途描かれたものが挟み込まれたかにも見える。これも特異な写本である。MSS. 718のヴェネツィア図は，同写本内の他の地図とは印象の異なる筆致の図であり，むしろ932年本系写本から引き写したかのように見える。これらの点を考え合わせると，927年本では見開きのヴェネツィア図はもともと加えられていなかった可能性も高いと思われ，慎重な検討が必要である。

76）海域ごとの叙述量の多寡や叙述される事項に偏りがあることはすでに確認されている［新谷 1990a］が，ここで見たように，都市ないしは国家が言及される頻度にも偏りがあることが知られる。ヴェネツィアやパプスブルク家，北アフリカなどの動向に注意が向けられていることは16世紀前半の国際事情を考えれば当然とも言えようが，ピーリー・ライースが当時のヨーロッパ・地中海世界の情勢に然るべく関心を寄せ，その関心を『キターブ・バフリエ』に反映させていることが知られる。

『キターブ・バフリエ』*Kitâb-i Baḥrîya*　参照写本一覧（未見写本を含む）

NT：付図のみで，本文を持たない。 NM：本文のみで，地図を持たない。 未見：新谷未見

番号	区分	写本記号	所蔵機関	所在地	備考
01	927/932?	Cod. MS. Or. 34	Kiel Universitatsbibliothek	Kiel	Venezia の説明文無し
02	927	Supplément turc 220	Bibliothèque Nationale	Paris	
03	927	MS. D'Orville 543	Bodleian Library	Oxford	
04	927	MS. 3612	Biblioteca Universitaria di Bologna	Bologna	
05	927	MS. 3613	Biblioteca Universitaria di Bologna	Bologna	
06	927	Oriental 4131	British Library	London	
07	927	987	Deniz Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
08	927	990	Deniz Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
09	927	TY 123 [Türkçe 123]	İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi	İstanbul	
10	927	172	Köprülü Kütüphanesi	İstanbul	
11	927	Coğrafya 1	Millet Kütüphanesi	Ankara	
12	927(?)NT	MSS. 718	Nasser D. Khalili Collection of Islamic Arts	London	
13	927	2990	Nuruosmaniye Kütüphanesi	İstanbul	Venezia の説明文は末尾を欠く
14	927	2997	Nuruosmaniye Kütüphanesi	İstanbul	
15	927	H. O. 192	Osterreichische Nationalbibliothek	Wien	
16	927	Eb 389	Sächsische Landesbibliothek	Dresden	Venezia 関係部分欠
17	927	Or. Fol. 4133	Sttaatsbibliothek zu Berlin	Berlin	Venezia の説明文は後半一部を欠く
18	927	Ayasofya 3161	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
19	927	Ayasofya 2605	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
20	927	Hamidiye 945	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
21	927	Hamidiye 971	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
22	927	Hüsrev Paşa 272	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
23	927	Yeni Cami 790	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	Venezia の説明文は末尾を欠く
24	927	Bağdat 337	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
25	927	LNS 75 MS	Dâr al-Âthâr al-Islâmîya	Kuwayt	
26	927?NM	340/2	Kandilli Rasathanesi Kütüphanesi, Boğaziçi Üniversitesi	İstanbul	未見

27	927/932?	Diez A. Foliant 57	Staatsbibliothek zu Berlin	Berlin	Venezia の説明文は末尾のみ
28	932	Supplément turc 956	Bibliothèque Nationale	Paris	
29	932NT	MS. 3609	Biblioteca Universitaria di Bologna	Bologna	
30	932	988	Deniz Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
31	932	989	Deniz Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
32	932	TY 6605 [Yıldız 6605]	İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi	İstanbul	
33	932	171	Köprülü Kütüphanesi	İstanbul	
34	932	Ayasofya 2612	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
35	932NM	Hüsrev Paşa 264	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	
36	932	Hazine 642	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
37	932	Revan 1633	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	Venezia 関係部分欠
38	932NT	Bağdat 338	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	
39	932	MS. W. 658	Walters Art Gallery	Baltimore	
40	932(?)	2989	Nuruosmaniye Kütüphanesi 旧蔵		未見
41	932(?)	3004	Nuruosmaniye Kütüphanesi 旧蔵		未見
42	932	MC Yz O-30	İstanbul Büyükşehir Belediyesi Atatürk Kitaplığı	İstanbul	

参考文献

Arı, Bülent,

2002：(ed.) *Pirî Reis, Kitab-ı Bahriye*, Ankara.

Bausani, Alessandro,

1979：L' Italia nel *Kitab-i Bahriyye* di Piri Reis, *Il Veltro. Rivista della Civiltà Italiana*, 23-2-4, pp. 173-196.

1980：La Sardegna nel *Kitab-i Bahriyye* di Piri Reis, *Geografia*, II, pp. 71-79.

1982：La Coste Toscane nel *Kitab-i Bahriyye* di Piri Reis, Aldo Gallotta & Ugo Marazzi (eds.), *Studia Turcologica Memoriae Alexii Bombaci Dicata*, Napoli, pp. 29-40.

1983a：La Costa Campana da Napoli a Policastro nel Portolano di Piri Reis (1521-1527), *Annali della Facoltà di Scienze Politiche*, Università di Cagliari, 9, pp. 71-80.

1983b：La Costa Italiana del Tirreno, da Civitavecchia a Ischia, nel Portolano di Piri Reis (1521-1527), *Rasa'il in Memoria di Umberto Rizzitano*, Palermo, pp. 53-64.

1984：Le Coste della Penisola Salentina nel Portolano di Piri Reis, Renato Traini (ed.), *Studi in Onore di Francesco Gabrieli nel suo Ottantesimo Compleanno*, Vol. 1, Roma, pp. 53–59.

1985：La Costa Muggia–Trieste–Venezia nel Portolano（1521–1527）di Piri Reis, Clelia Sarnelli Cerqua（ed.）, *Studi Arabo–islamici in Onore di Roberto Rubinacci nel suo Settantesimo Compleanno*, Napoli, pp. 65–69.

1986：Le Coste Ioniche della Calabria da Taranto a Reggio nel Portolano di Piri Reis（1470–1554）, Luigi Serra（ed.）, *Gli Interscambi Culturali e Socio–Economici fra l'Africa Settentrionale e l'Europa Mediterranea. Atti del Congresso Internazionale di Amalfi, 5–8 dicembre 1983*, Napoli, pp. 453–67.

1987：Venezia e l'Adriatico in un Portolano Turco, L. Lanciotti（ed.）, *Venezia e l'Oriente*. Atti del XXV Corso Internazionale di Alta Cultura（Venezia, 27 agosto–17 settembre 1983）, Firenze, pp. 339–352.

1990：*L'Italia nel Kitab-ï Bahriyye di Piri Reis*, Leonardo Capezzone（ed.）, Venezia.

Chambers, David & Pullan, Brian,

1992：（eds.）*Venice: A Documentary History, 1450–1630*, Oxford UK and Cambridge USA（repr. University of Toronto Press, 2001）.

Deny, J.,

1921：*Grammaire de la Langue Turque (Dialecte Osmanlı)*, Paris（repr. Niederwalluf bei Wiesbaden, 1971）.

Goodrich, Th. D.,

1985：Atlas–i Hümayun: A Sixteenth–Century Ottoman Maritime Atlas Discovered in 1984, *Archivum Ottomanicum*, 10, pp. 83–101.

1986：The Earliest Ottoman Maritime Atlas — The Walters Deniz Atlası, *Archivum Ottomanicum*, 11, pp. 25–50.

1990：*The Ottoman Turks and the New World. A Study of the Tarih–i Hind–i Garbi and Sixteenth–Century Ottoman Americana*, Wiesbaden.

2004：A Cartographic Innovation of Piri Reis in His *Kitab–ı Bahriye*," in *CIÉPO: Osmanlı Öncesi ve Osmanlı Araştırmaları Uluslararası Komitesi — XIV. Sempozyumu Bildirileri, 18–22 Eylül 2000*, ed. Tuncer Baykara（Ankara: Türk Tarih Kurumu）, pp. 201–210.

n. d.（2004）：The 5658 Maps of the Kitab–i Bahriye of Piri Reis, *Uluslararası Piri Reis Sempozyumu Tebliğler Kitabı (27–29 Eylül 2004)*, İstanbul, 〈6–92〉–〈6–113〉.

飯田巳貴,

2016：16，17世紀のヴェネツィアとアドリア海の海外領土――経済的側面からの考察――,

《越村編 2016》, pp. 55–70。
Kahane, H. & R., Tietze, A.,
1958：*The Lingua Franca in the Levant, Turkish Nautical Terms of Italian and Greek Origin*, Urbana.
Karayazgan, Metin,
1981：*Denizci Sözlüğü (Gemici Dili), Terimler, Deyimler*, Karşıyaka–İzmir.
越村　勲,
2016：（編）『16・17世紀の海商・海賊――アドリア海のウスコクと東シナ海の倭寇』, 彩流社。
Kurtoğlu, F. & Alpagot, H.,
1935：(eds.) Piri Reis, *Kitabı Bahriye*, İstanbul.
Lowry, Heath W.,
2010：Pîrî Reis Revisited: The *Kitâb–ı Bahriyye* as a Source for Ottoman History, The Aegean Port of Kavala & the Island of Limnos (İlimli) as Described by Pîrî Reis, *Osmanlı Araştırmaları*, Sayı XXXV, pp. 7–31.
永井三明,
1994：『ヴェネツィア貴族の世界――社会と意識――』, 刀水書房。
Ökte, Ertuğrul Zekâi,
1988：(ed.) Pîrî Reis, *Kitab–ı Bahriye*, 4 vols., Ankara.
Pedani, Maria Pia,
2015：Piri Reis in Venetian Documents, *Mediterranea: Ricerche Storiche*, 34, pp. 319–324.
Redhouse, James W.,
1890/1974：*A Turkish and English Lexicon*, Constantinople (repr. Beirut, 1974).
Redhouse, James W., et al.,
1974：*New Redhouse Turkish–English Dictionary*, İkinci baskı, İstanbul.
Renda, Günsel,
1992：Representations of Towns in Ottoman Sea Charts of the Sixteenth Century and their Relation to Mediterranean Cartography, *Süleymân the Magnificent and his Time, Acts of the Parisian Conference, Galeries Nationales du Grand Palais, 7–10 March 1990*, Paris, pp. 279–297.
Sarıcaoğlu, Fikret,
2014：(ed.) Pîrî Reis, *Kitab–ı Bahriyye (Piri Reis's Kitab–ı Bahriyye)*, Anakra.
Senemoğlu, Yavuz,
1974：(terc.) Pîrî Reis, *Kitâb–ı Bahriyye, Denizcilik Kitabı*, 2 vols.
Sertoğlu, Midhat,

1986：*Osmanlı Tarih Lûgatı*, İstanbul.
新谷英治,
1990a：“Kitāb-i Baḥrīya”の性格――Ayasofya 2612写本本文を中心に――,『東洋史研究』, 49-2, pp. 107-139.
1990b：『キターブ・バフリエ』ヒジュラ暦927年本系写本８種,『京都橘女子大学研究紀要』, 17, pp. 222-246.
1992：『キターブ・バフリエ』の全体像とオスマン朝の地中海世界,『西南アジア研究』, 37, pp. 1-18.
1997：『キターブ・バフリエ』ヒジュラ暦932年本序文,『関西大学東西学術研究所紀要』, 30, pp. 55-83.
2000：オスマン朝期の地中海航海案内書と地図, 新谷英治編『中東世界の伝統技術に関する歴史地理学的研究』（科学研究費補助金基盤研究（A）［研究代表者新谷英治］研究成果報告書）, pp. 209-235.
2001：ピーリー・ライースの世界認識――*Kitâb-i Baḥrîya* 韻文序と世界図２種の分析から――,『関西大学東西学術研究所創立50周年記念論文集』, 関西大学東西学術研究所, pp. 167-184.
2011a：『キターブ・バフリエ』韻文序に見えるインド洋, 橋寺知子・森部豊・蜷川順子・新谷英治共編『アジアが結ぶ東西世界』, 関西大学東西学術研究所, 420-449.
2011b：『キターブ・バフリエ』に見えるアナトリア南岸,『西南アジア研究』, 第75号, pp. 44-68.
2012：『キターブ・バフリエ』韻文序に見えるペルシア湾及びインド洋西部, 森部豊・橋寺知子共編『アジアにおける文化システムの展開と交流』, 関西大学東西学術研究所, 179-208.
2015a：『キターブ・バフリエ』に見えるシリア海岸,『関西大学東西学術研究所紀要』, 48, pp. 89-107.
2015b：地中海国家オスマン朝とピーリー・ライース作品, 近藤信彰編『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 121-142.
2016：異なる２種の『キターブ・バフリエ』,『関西大学東西学術研究所紀要』, 49, pp. 127-161.
2020：地中海世界の祈りの場――オスマン朝の航海案内書から――, 新谷英治・松井幸一編『祈りと祈りの場』, 関西大学東西学術研究所, pp. 245-268.
2021：『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸,『關西大學文學論集』, 70-4, pp. 1-45。
Soucek, Svat,
1971：The ‘Ali Macar Reis Atlas’ and the Deniz Kitabi: Their Place in the Genre of

Portolan Charts and Atlases, *Imago Mundi*, 25, pp. 17–27.
1973a：A propos du Livre d'Instructions Nautiques de Pīrī Re'īs, *Revue des Études Islamiques*, 41–2, pp. 241–255.
1973b：Tunisia in the *Kitab–i Bahriye* by Piri Reis, *Archivum Ottomanicum*, 5, pp. 129–296.
1975：Certain Types of Ships in Ottoman–Turkish Terminology, *Turcica*, 7, pp. 233–249.
1992：Islamic Charting in the Mediterranean, Harley, J. B. & Woodward, D. (eds.), *The History of Cartography*, Vol. 2, Book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, The University of Chicago Press, pp. 263–292.
1992/1996：*Piri Reis and Turkish Mapmaking after Columbus, The Khalili Portolan Atlas*, London.
1993a：Pīrī Re'īs, *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, Vol. 8, pp. 308–9.
1993b：Piri Reis and Süleyman the Magnificent, Halil İnalcık and Cemal Kafadar (eds.), *Süleyman the Second and his Time*, Istanbul, pp. 343–52. [repr. in Soucek 2009]
1994：Piri Reis and Ottoman Discovery of the Great Discoveries, *Studia Islamica*, 79, 121–142. [repr. in Soucek 2009]
2009：*Studies in Ottoman Naval History and Maritime Geography*, Piscataway–U. S. A. / Istanbul–Turkey.
2013a：*Piri Reis & Turkish Mapmaking after Columbus*, Istanbul.
2013b：*Piri Reis ve Kolomb Sonrası Türk Haritacılığı*, İstanbul.

ナタシャ・シュテファネッツ（Štefanec, Nataša），
2016：ウスコク，戦争と交易の間で――アドリア海とその後背地におけるヴェネツィア・オスマン・ハプスブルク国境と海賊――，越村勲訳，《越村編 2016》，pp. 13–35。

Ülkekul, Cevat,
2007：*XVI. Yüzyılın Denizci bir Bilim Adamı Yaşamı ve Yapıtlarıyla Piri Reis*, 3 cilt, İstanbul.
2009：*Türk Seyir, Hidrografi ve Oşinografi Çalışmalarının 1909 Öncesi Tarihi*, İstanbul.
2013：*Piri Reis ve Türk Kartograflarının Çizgileriyle XVI., XVII. ve XVIII. Yüzyıllarda İstanbul*, İstanbul.
2015a：*Piri Reis'in Hayatı ve Eserleri (Yanlışlar ve Doğrular)*, İstanbul.
2015b：*Piri Reis'in Kalemi ve Türk Kartograflarının Çizgileriyle XVI–XVII. Yüzyıllarda Kuzey Afrika Kıyıları, Nil Nehri ve Kahire*, İstanbul.
2015c：*Piri Reis'in Kalemi ve Türk Kartograflarının Çizgileriyle Sicilya Adası / Sicily with Writings and Drawings of Piri Reis*, İstanbul.
2015d：*Piri Reis ve Türk Kartograflarının Çizgileri ile XVI–XVII–XVIII. Yüzyılın Venedik Görünümleri*, İstanbul.

Ülkekul, Cevat & Can, Ayşe Hande,
2007：*Piri Reis'in Yaşamı, Yapıtları ve Bahriyesinden Seçmeler*, İstanbul.
Ventura, A.,
1988：*La Puglia di Piri Re'is. La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Scritture e Città, 3, Cavallino.
1990：*Il Regno di Napoli di Piri Re'is, La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Scritture e Città, 6, Cavallino.
1991：*Gli Stati Italiani de Piri Re'is. La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Scritture e Città, 7, Cavallino.
2000：*L'Italia di Piri Re'is. La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Cavallino.